

【論文】

視点取得が高齢者ステレオタイプの抑制による
逆説的効果に与える影響^{1), 2), 3)}

The influence of perspective taking on paradoxical effects
in suppressing elderly stereotypes

山本真菜
YAMAMOTO Mana

岡 隆
OKA Takashi

目次

1 問題

- (1) ステレオタイプの抑制
- (2) 逆説的効果のメカニズム
- (3) 逆説的効果の低減方略
- (4) 抑制における視点取得の役割
- (5) 本研究の目的

2 方法

- (1) 参加者
- (2) 実験計画
- (3) 手続き
- (4) 質問票の構成

3 結果

- (1) 分析対象者
- (2) 操作チェック
- (3) 視点取得が逆説的効果に与える影響
- (4) 自尊感情、視点取得およびエイジズの個人差による差異

4 考察

- (1) ステレオタイプ抑制と視点取得がステレオタイプの判断に与える影響
- (2) 自尊感情の役割
- (3) 視点取得およびエイジズの個人差とステレオタイプの判断
- (4) 本研究の限界点と今後の課題

要 旨

ステレオタイプを抑制すると抑制しない場合よりもその後かえってステレオタイプの判断が行われるという逆説的効果がある。本研究では、高齢者ステレオタイプを取り上げ、視点取得によってステレオタイプ抑制による逆説的効果が低減されるかどうかを検討した。大学生138名に対して質問票による実験を行った。まず、高齢者の写真を提示してその人物の1日を記述させ、その際に、ステレオタイプ抑制の操作と視点取得の操作を行った。次に、別の高齢者の写真を提示し、その人物に対する評価を求め、高齢者ステレオタイプの測定を行った。最後に、視点取得尺度、自尊感情尺度、エイジズム尺度に回答を求めた。その結果、実験操作の効果、逆説的効果はみられなかったが、視点取得の高い個人は低い個人に比べステレオタイプの判断の得点が低く、エイジズムの強い個人は弱い個人に比べステレオタイプの判断の得点が高いことが示された。さらに、視点取得を行うことによって自尊感情が高いほどステレオタイプの判断を行いやすくなる可能性が示唆された。視点取得、ステレオタイプの判断および自尊感情の関連について考察をした。

1 問題

(1) ステレオタイプの抑制

ステレオタイプとはある集団やその集団の成員に対する固定観念であり、繰り返し想起して使用することによってその利用が自動化される (Bargh, 1990, 1999; Bargh & Barn-dollar, 1996)。そのため、対象に接触するとステレオタイプは自動的に活性化され (Devine, 1989)、ある集団やその集団の成員を人種、民族、職業、性別、年齢などの属性に基づいて判断してしまうのである。

このようなステレオタイプ化を自動的な反応と統制的な反応の2段階に分けて説明する分離モデルがある (Devine, 1989)。まず、自動的な段階では、ステレオタイプに関する手がかりに接触すると、ステレオタイプが活性化され利用されやすい状態になる。この段階は、意識的には統制できない自動的な過程であると考えられている。次の統制的な段階では、ステレオタイプが思考上に浮かんでいることを認識して、判断や行動を決定する。この段階は、意識的に統制できる過程であると考えられている。このモデルによれば、たとえ平等主義的な個人であってもステレオタイプの手がかりに接触するとステレオタイプが活性化されてしまう。つまり、偏見が低い個人も偏見が高い個人と同じくらいステレオタイプは活性化されていることが示されている (Devine, 1989)。偏見が低い個人は、判断や行動を決定する統制的な段階で、平等主義的信念や社会的規範に基づいてステレオタイプを表出しないようにしているのである。

しかし、ステレオタイプを表出しないように意識的に努力することの弊害が指摘されている。ステレオタイプを考えないように努力するとかえってその内容が思考上に浮かび判断に利用されやすくなるという現象が示されており、この現象はステレオタイプ抑制による逆説的効果と呼ばれている (Macrae, Bodenhausen, Milne, & Jetten, 1994)。例えば、

Macrae et al. (1994) では、スキンヘッドの人物の1日を記述する際に、ステレオタイプの記述をしないようにというステレオタイプ抑制の教示を与えられた参加者は、そのような教示を与えられなかった参加者に比べ、その後別々のスキンヘッドの人物の1日を記述する課題でその文章の内容がよりステレオタイプ的であり(実験1)、スキンヘッドの人物からの物理的距離が遠く(実験2)、スキンヘッドの人物に対するステレオタイプ的特性に対するアクセス可能性が高い(実験3)という逆説的効果が確認された。逆説的効果は、バイアスのない判断を目的としているステレオタイプ抑制において反意図的な影響であり、ステレオタイプ抑制の弊害であるといえる。

本研究では、ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減するための方略として視点取得の効果を検討する。

(2) 逆説的効果のメカニズム

ステレオタイプの抑制は、2つの認知過程によって行われていると考えられている(Wegner, 1994; Wegner & Erber, 1992)。想定されている2つの認知過程は、実行過程と監視過程であり、実行過程は抑制対象以外の対象を探す過程であり、監視過程は思考上に抑制対象がないことを確認する過程である。実行過程は意識的に行われる認知資源を必要とする過程であり、監視過程は無意識的に行われる認知資源を必要としない過程である。監視過程は、実行過程によって探し出された思考が抑制対象でないことを確認しているため、監視過程によって抑制対象は常に参照されている。このため、抑制を行っている間は、抑制対象は常に活性化され続けそのアクセス可能性は高まり続けることになり、抑制後は抑制前よりも抑制対象が思考上に浮かびやすくなると考えられている。

つまり、ステレオタイプを抑制する際、抑制中はそのステレオタイプへのアクセス可能性が高まり続け、抑制を止めた後もステレオタイプへのアクセス可能性は高いままであり、そのため抑制前よりも抑制後の方がステレオタイプ的な判断がされやすくなると考えられる。

(3) 逆説的効果の低減方略

ステレオタイプ抑制による逆説的効果を低減するための方略として、代替思考を利用することの効果が検討されている。思考を抑制する際に、何か他のことを考えることで逆説的効果が低減されることが示されている(Wenger, Schneider, Carter, & White, 1987)。例えば、Wegner et al. (1987) では、「白くま」について考えることを抑制する際に、代替思考として「赤のフォルクスワーゲン」を考えると、単に抑制するだけの場合よりも、逆説的効果が低減され「白くま」に関する思考が浮かびにくいことを示した。

ステレオタイプを抑制する際は、対人判断の文脈で行われるため、人物に関連することを代替思考として用いる必要がある(田戸岡・村田, 2010)。実際に、Oe & Oka (2003) では、参加者が女性ステレオタイプを抑制する際に、女性のステレオタイプ以外の女性の特性を代替思考として使用することによって、逆説的効果が低減されていた。同様に、田戸岡・村田(2010)では、ステレオタイプ内容モデルに基づき、高齢者の能力次元のネガ

ティブな特性（無能な）を抑制する際に、人柄次元のポジティブな特性（温かい）を代替思考として使用することによって、逆説的効果が低減されていた。これらの実験では、代替思考として対象人物に関連する特性を用いており、その結果、逆説的効果が低減されることを示している。

対象人物に関連する特性を代替思考として用いると逆説的効果が低減される理由は、Wegnerの思考抑制のモデルに基づき、次のように考えられる。対象人物に関連する特性は、アクセス可能性が高い代替思考であるため、思考上に浮かび続きやすく、比較的、実行過程および監視過程の働きが弱くてもよく、この弱い監視過程の働きによって、抑制対象であるステレオタイプに対するアクセス可能性が高まりにくいと考えられる。

(4) 抑制における視点取得の役割

以上のように、ステレオタイプ抑制による逆説的効果の低減に有効な代替思考は、人物に関連し、かつ認知資源を必要としないアクセス可能性の高い内容であると考えられる。このような代替思考を使用し、逆説的効果を低減するための方略として視点取得が考えられる。Galinsky, Ku, & Wang (2005)によると、視点取得は、他者の立場で自分自身を想像したり、他者の視点から世界を想像するプロセスと定義されている。視点取得のこれまでの研究では、知覚的または視空間的な視点取得、認知的な視点取得、感情的な視点取得などが区別されており (Erle & Topolinski, 2017)、本研究では認知的能力として視点取得を扱う (Eisenberg, Fabes, Murphy, Karbon, Maszk, Smith, O'Boyle, & Suh, 1994; Richardson, Green, & Lago, 1998)。

視点取得を行うことによって自己概念が活性化され自己と他者の表象が重なり (Galinsky, Ku, & Wang, 2005)、ステレオタイプの活性化が抑えられ (Galinsky & Moskowitz, 2000)、ステレオタイプの判断が抑制される (Galinsky & Ku, 2004) ことが示されている。Galinsky & Ku (2004) では、高齢者に対するステレオタイプを取り上げ、視点取得を行った場合に自尊感情が高い参加者は低い参加者に比べ高齢者を肯定的に評価したことを示している。具体的には次のような実験が行われた。まず、参加者にはこの実験は視覚情報からライフイベントの詳細を構築する能力を調査することを目的としているというカバーストーリーが伝えられた。次に、参加者は新聞スタンドの近くで椅子に座っている年配の男性の写真が提示され、この写真の人物の人生における典型的な1日についてのエッセイを書くように教示された。この際に、視点取得条件の参加者には、「写真の人物の視点に立ってください。つまり、その人になったつもりで、その人の靴を履いてその人の典型的な1日を体験してください」という教示が行われ、一方、統制条件の参加者にはエッセイの書き方についての教示はなかった。エッセイ課題の後、エッセイ課題と次の高齢者に対する評価を行う課題とを分離するための短いフィルター課題を行った。次に、参加者は一般的な高齢者についての評価を、13の形容詞対を用いてSD法によって行った。高齢者を評価する際には、「すべてのグループメンバーが全く同じではないが、グループメンバーは多くの特徴において似ている傾向があるので、高齢者の一般的な特徴についてあなたの個人的な意見を回答してください」という教示がされた。最後に、参加者は特性自尊感情の尺度

(Rosenberg, 1965) に回答を行った。この特性自尊感情の尺度は、個人の安定的な自己評価を測定する10項目から構成されており、例えば「自分は少なくとも他人と同等の価値がある人間だと思う」、「全体的に見て自分は駄目な人間だと思う」(逆転項目)などの項目がある。高齢者に対する13項目の評価の平均値を算出し、高齢者に対する評価の得点とした。分析の結果、視点取得条件の参加者は統制条件の参加者よりも高齢者を肯定的に評価しており、さらに自尊感情×視点取得の交互作用効果が有意であり、自尊感情の高い参加者において視点取得条件は統制条件よりも高齢者を肯定的に評価しており、一方、自尊感情の低い参加者においては視点取得条件と統制条件で有意な差はみられなかった。このように、視点取得を行うことで、肯定的な自己概念が活性化された個人は高齢者に対して肯定的な評価を行うことが示唆されている。

この視点取得の効果は、対象人物だけでなく、その人物が所属する集団に対しても生じることが示されており (Galinsky & Moskowitz, 2000)、認知資源を必要としない非意識的な過程であると考えられている (Davis, Conklin, Smith, & Luce, 1996)。このように、視点取得を行うことによって活性化される自己概念は、人物に関連する特性であり、かつ認知資源を必要としないアクセス可能性の高い代替思考であると考えられる。つまり、ステレオタイプ抑制の際に視点取得を行うことによって、自己概念が認知資源を必要としないアクセス可能性の高い代替思考となり、その結果、視点取得を行わない場合に比べ、逆説的效果が低減されると考えられる。

(5) 本研究の目的

本研究では、視点取得によってステレオタイプ抑制による逆説的效果が低減されるかどうかを検討する。第1に、先行研究と同様に、視点取得あり条件はなし条件に比べ、ステレオタイプの判断の得点が低いと予測する。第2に、先行研究と同様に、ステレオタイプ抑制あり条件はなし条件に比べ、ステレオタイプの判断の得点が高い、つまりステレオタイプ抑制による逆説的效果が生じると予測する。第3に、ステレオタイプ抑制を行った場合、視点取得あり条件はなし条件に比べステレオタイプの判断の得点が低い、つまり視点取得によって逆説的效果が低減されると予測する。

さらに、本研究では個人差として自尊感情、視点取得およびエイジズムを測定し、条件間でこれらの参加者による差がみられないかどうかを確認し、さらにステレオタイプの判断との関連を検討する。先行研究に基づき、自尊感情については次のように予測する。自尊感情の高い参加者においては視点取得を行った場合は行わなかった場合に比べステレオタイプの判断の得点が低く、一方、自尊感情の低い参加者においては視点取得を行った場合と行わなかった場合でステレオタイプの判断の得点に差はみられないと予測する。さらに、自尊感情の高い参加者においてステレオタイプ抑制を行った場合は、視点取得あり条件はなし条件に比べステレオタイプの判断の得点が低く、一方、自尊感情の低い参加者においてはステレオタイプ抑制を行った場合、視点取得あり条件となし条件でステレオタイプの判断の得点に差はみられないと予測する。

本研究では、高齢者ステレオタイプを取り上げ以上の予測を検討する。高齢男性の健

康や身体的状態に関係のないステレオタイプの内容として、先行研究では「孤独な」「依存している」「頑固な」「伝統的な」「忘れやすい」が調査により選定されていることから (Galinsky & Moskowitz, 2000), 本研究では孤独なという内容のステレオタイプについて扱うこととした。

2 方法

(1) 参加者

大学生138名 (男性85名, 女性47名, 不明6名; 平均年齢19.64 ($SD=1.17$)) が実験に参加した。

(2) 実験計画

ステレオタイプ抑制 (あり, なし) × 視点取得 (あり, なし) の2要因参加者間計画であった。従属変数は, 高齢者に対するステレオタイプの判断の得点であった。

(3) 手続き

授業を利用して, 以下の質問票への回答を依頼した。質問票を参加者に配布し, 研究協力の任意性と個人情報保護されることなどを質問票の表紙に明記し, 口頭でも説明を行った。具体的には, 参加は自由でありいかなる時点においても参加を取りやめることができ, 参加を取りやめたことによって不利益が生じることは一切ないこと, この質問票で得られたデータは研究目的以外で使用することはなく結果は統計的に処理され個人が特定されるような使用はされないこと, 質問票への回答をもって研究への参加に同意したとみなすことを説明した。さらに, この冊子は表面上2つの研究の調査票がセットになったものであり, 1つ目の調査票は「文の生成に関する研究」であり, 2つ目の調査票は「人物の適正判断に関する研究」であると説明を行った。質問票への回答は, 最後まで参加者各自で進めるように教示をした。全員の回答が終わった後, 質問票を回収し, デブリーフィングを行った。

(4) 質問票の構成

質問票は以下の内容で構成されていた。まず, 「文の生成に関する研究」と表された以下の質問に回答を求めた。

視点取得とステレオタイプ抑制の操作 高齢男性の写真を提示し, その人物の1日について記述を求めた。その際, 視点取得あり条件では「あなたがもし写真の人物であったならば, どのように1日を過ごしますか。写真の人物の立場に立って, 写真の人物の目を通して, その人が朝起きてから寝るまでの1日の流れについて記述してください」という視点取得の教示を記載した。視点取得なし条件ではこのような教示は記載しなかった。さらに, ステレオタイプ抑制あり条件では「高齢者には「孤独な」といったイメージがありますが, こういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください」という

ステレオタイプ抑制の教示を記載した。ステレオタイプ抑制なし条件ではこのような教示は記載しなかった。

次に、「人物の適性判断に関する研究」と表された以下の質問に回答を求めた。この質問票では、就職場面において、書類上の写真のみでどのような印象が抱かれるのか調査することを目的としていることを記載した。

高齢者ステレオタイプの測定 別の高齢男性の写真を提示し、その人物の印象について回答を求めた。「孤独な」、「寂しい」、「独りぼっちの」、「孤立した」に7件法（1：「全く当てはまらない」から7：「非常に当てはまる」）で回答を求めた。フィルター項目としてその他に8項目（手際がいい、温かい、記憶力がいい、思いやりがある、頭がいい、親しみやすい、能力がある、優しい）が設けられており、さらに、フィルターとして若い男性の写真についても同様に回答を求めた。

視点取得の測定 視点取得の個人差を測定するために、櫻井（1988）の多次元共感測定尺度の下位因子である視点取得の7項目について7件法（1：「全く当てはまらない」から7：「非常によく当てはまる」）で回答を求めた。質問項目は、「他の人たちの立場にたつて、物事を考えることは困難である」（逆転項目）、「何かを決定するときには、自分と反対の意見を持つ人たちの立場に立って考えてみる」、「人を批判する前に、もし自分がその人であったならば、どう思うであろうかと考えるようにしている」、「友達をよく理解するために、彼らの立場になって考えようとする」などから構成されている。

自尊感情の測定 自尊感情を測定するために、Rosenberg（1965）の日本語版である山本・松井・山城（1982）の自尊感情尺度を用いた。10項目について7件法（1：「全く当てはまらない」から7：「非常によく当てはまる」）で回答を求めた。質問項目は、「少なくとも人並みには、価値のある人間である」、「色々な良い素質をもっている」、「敗北者だと思えることがよくある」（逆転項目）、「物事を人並みには、うまくやれる」などから構成されている。

エイジズムの測定 エイジズムを測定するために、原田・杉澤・杉原・山田・柴田（2004）の日本版Fraboniエイジズム尺度短縮版の12項目について7件法（1：「全く当てはまらない」から7：「非常によく当てはまる」）で回答を求めた。質問項目は「同じ話を何度もするのでイライラする」、「高齢者とのつきあいは結構楽しい」（逆転項目）、「スポーツ施設を使ってほしくない」、「赤ん坊のめんどろを信頼して任すことができない」などから構成されている。

デモグラフィック変数の測定 最後に、性別と年齢について尋ねた。

3 結果

(1) 分析対象者

高齢者の1日について記述を行う課題において全く記述がなかった参加者と、視点取得尺度、自尊感情尺度、エイジズム尺度のいずれかにおいてすべての項目が欠損値であった参加者、高齢者ステレオタイプを測定した4項目のうち1つでも欠損値のあった参加者の

9名を除いた129名（男性83名，女性45名，不明1名；平均年齢19.63歳（ $SD=1.18$ ））のデータを分析に用いた。条件ごとの人数は，ステレオタイプ抑制あり条件における視点取得あり条件は34名（男性20名，女性14名），視点取得なし条件は31名（男性19名，女性11名，不明1名），ステレオタイプ抑制なし条件における視点取得あり条件は32名（男性23名，女性9名），視点取得なし条件は32名（男性21名，女性11名）であった。

各条件間において，参加者の自尊感情，視点取得およびエイジズムに差がないかどうかを検討するためにステレオタイプ抑制（あり，なし）×視点取得（あり，なし）の2要因分散分析をそれぞれの得点について行った。その結果，自尊感情得点と視点取得得点については有意な差はみられなかったが，エイジズム得点についてはステレオタイプ抑制の主効果が有意であり，ステレオタイプ抑制あり条件（ $M=3.14$, $SD=0.88$ ）はステレオタイプ抑制なし条件（ $M=3.58$, $SD=1.22$ ）に比べ有意にエイジズム得点が低かった（ $F(1, 123)=5.48$, $p=.021$, $\eta_p^2=.043$ ）。なお，尺度得点の算出については，以下の「自尊感情，視点取得およびエイジズムの個人差による差異」の節で示す。

(2) 操作チェック

ステレオタイプ抑制と視点取得の操作の有効性を確認するために，参加者が作成した高齢者の1日についての記述の内容を分析した。まず，ステレオタイプ抑制あり条件の参加者が高齢者ステレオタイプを抑制していたかどうかを検討するために，実験条件を知らない2名の評定者が記述の内容について高齢者ステレオタイプにどの程度当てはまるかを7件法（1：「全く当てはまらない」から7：「非常によく当てはまる」）で評定した。2名の評定の相関が高かったため（ $r=.889$ ），2名の評定者の評定値の平均値を算出し，その値を参加者によって作成された記述内容のステレオタイプ度得点とした。ステレオタイプ抑制あり条件の得点は $M=4.49$ （ $SD=1.81$ ）であり，ステレオタイプ抑制なし条件の得点は $M=4.50$ （ $SD=1.73$ ）であった。この条件間に差があるかどうかを検討するために，ステレオタイプ度得点について t 検定を行った結果，有意な差はみられなかった（ $t(127)=0.03$, $p=.980$, Choen's $d=.004$ ）。

次に，視点取得あり条件の参加者が写真の人物に視点取得を行っていたかどうかを検討するために，実験条件を知らない2名の評定者が記述の内容について大学生の1日にどの程度当てはまるかを7件法（1：「全く当てはまらない」から7：「非常によく当てはまる」）で評定した。2名の評定の相関がある程度あったため（ $r=.602$ ），2名の評定者の評定値の平均値を算出し，その値を参加者によって作成された記述内容の視点取得度得点とした。視点取得あり条件の得点は $M=3.11$ （ $SD=1.29$ ）であり，視点取得なし条件の得点は $M=2.77$ （ $SD=1.29$ ）であった。この条件間に差があるかどうかを検討するために，視点取得度得点について t 検定を行った結果，有意な差はみられなかった（ $t(127)=1.52$, $p=.132$, Choen's $d=.267$ ）。

(3) 視点取得が逆説的効果に与える影響

視点取得によってステレオタイプ抑制による逆説的効果が低減されるかどうかを検討す

るために、ステレオタイプ抑制（あり，なし）×視点取得（あり，なし）の2要因の分散分析をステレオタイプの判断の得点に対して行った。ステレオタイプの判断の得点は、高齢者ステレオタイプを測定した「孤独な」、「寂しい」、「独りぼっちの」、「孤立した」の4項目の平均値を算出し、その値をステレオタイプの判断の得点とした（ $\alpha = .832$ ）。

分散分析の結果、ステレオタイプ抑制の主効果、視点取得の主効果および交互作用ともに有意な効果はみられなかった（ステレオタイプ抑制の主効果： $F(1, 125) = 0.0002, p = .998, \eta_p^2 = .000001$ ；視点取得の主効果： $F(1, 125) = 0.06, p = .810, \eta_p^2 = .0005$ ；交互作用効果： $F(1, 125) = 0.13, p = .719, \eta_p^2 = .001$ ）。

(4) 自尊感情、視点取得およびエイジズムの個人差による差異

自尊感情尺度、視点取得尺度、エイジズム尺度の項目について、逆転項目の処理を行い、それぞれの項目の平均値を算出しそれらの値を自尊感情得点、視点取得得点、エイジズム得点とした。これらの得点は、値が高いほど自尊感情、視点取得、エイジズムが高いことを示す。内的一貫性を示すCronbachの α 係数は、自尊感情得点は $\alpha = .842$ であり、視点取得得点は $\alpha = .720$ 、エイジズム得点は $\alpha = .895$ であった。自尊感情、視点取得およびエイジズムの個人差による差異を検討するために、これらの自尊感情得点、視点取得得点およびエイジズム得点をそれぞれ要因に加えた分散分析を行った。

まず、自尊感情得点の高群と低群に参加者を分けて、ステレオタイプ抑制（あり，なし）×視点取得（あり，なし）×自尊感情（高，低）の3要因の分散分析をステレオタイプの判断の得点に対して行った（表1）。自尊感情得点の中央値（3.80）を境にして、中央値より高い値の参加者を高群、中央値より低い値の参加者を低群とした。自尊感情得点が3.80点の参加者が5名いたため、この5名が分析から除外され、高群が62名、低群が62名の合計124名が分析対象となった⁴⁾。各条件における自尊感情の高低群の人数は、ステレオタイプ抑制あり条件における視点取得あり条件では自尊感情高群が18名、低群が16名であり、視点取得なし条件では高群が13名、低群が16名であった。ステレオタイプ抑制なし条件における視点取得あり条件では高群が15名、低群が14名であり、視点取得なし条件では高群が16名、低群が16名であった。分析の結果、視点取得×自尊感情の2要因の交互作用効果が有意であった（ $F(1, 116) = 10.40, p = .002, \eta_p^2 = .082$ ）。単純主効果の検定を行った結果、視点取得あり条件において、自尊感情高群（ $M = 4.19, SD = 1.07$ ）は低群（ $M = 3.66, SD = 0.89$ ）に比べステレオタイプの判断の得点が高い傾向にあり（ $F(1, 116) = 3.82, p = .053$,

表1 ステレオタイプ抑制、視点取得および自尊感情条件ごとのステレオタイプの判断の得点

	視点取得あり条件		視点取得なし条件	
	自尊感情高群	自尊感情低群	自尊感情高群	自尊感情低群
ステレオタイプ抑制あり	4.17(1.11)	3.70(0.96)	3.35(1.08)	4.19(0.75)
ステレオタイプ抑制なし	4.22(1.06)	3.61(0.84)	3.59(1.54)	4.20(1.12)

注) 括弧内は標準偏差を示す。

$\eta_p^2 = .032$), 視点取得なし条件において, 自尊感情高群 ($M = 3.48, SD = 1.33$) は低群 ($M = 4.20, SD = 0.94$) に比べステレオタイプの判断の得点が有意に低かった ($F(1, 116) = 6.76, p = .011, \eta_p^2 = .055$)。さらに, 自尊感情高群において, 視点取得あり条件 ($M = 4.19, SD = 1.07$) はなし条件 ($M = 3.47, SD = 1.33$) に比べステレオタイプの判断の得点が有意に高く ($F(1, 116) = 6.77, p = .010, \eta_p^2 = .055$), 自尊感情低群において, 視点取得あり条件 ($M = 3.66, SD = 0.89$) はなし条件 ($M = 4.20, SD = 0.94$) に比べステレオタイプの判断の得点が低い傾向にあった ($F(1, 116) = 3.83, p = .053, \eta_p^2 = .032$)。なお, それぞれの要因の主効果と, 他の交互作用効果については有意な効果はみられなかった。

次に, 視点取得の個人差得点についても同様に中央値 (4.57) を境に高群と低群に分けて, ステレオタイプ抑制 (あり, なし) \times 視点取得 (あり, なし) \times 視点取得の個人差 (高, 低) の3要因の分散分析を行った。視点取得を測定した尺度に欠損値があった参加者1名を除き, 高群67名, 低群61名の合計128名を分析対象とした。各条件における視点取得の高低群の人数は, ステレオタイプあり条件における視点取得あり条件では視点取得高群が19名, 低群が14名であり, 視点取得なし条件では高群が16名, 低群が15名であった。ステレオタイプなし条件における視点取得あり条件では高群が12名, 低群が20名, 視点取得なし条件では高群が20名, 低群が12名であった。分析の結果, 視点取得の個人差の主効果が有意傾向であり ($F(1, 120) = 3.43, p = .066, \eta_p^2 = .028$), 視点取得高群 ($M = 3.73, SD = 1.07$) は低群 ($M = 4.09, SD = 1.12$) に比べステレオタイプの判断の得点が低い傾向がみられた。なお, その他の主効果と, 交互作用効果については有意な効果はみられなかった。

次に, エイジズム得点についても同様に中央値 (3.29) を境に高群と低群に分けて, ステレオタイプ抑制 (あり, なし) \times 視点取得 (あり, なし) \times エイジズム (高, 低) の3要因の分散分析を行った。エイジズムを測定した尺度に欠損値のあった参加者2名を除き, 高群61名, 低群66名の合計127名を分析対象とした。各条件におけるエイジズム得点の高低群の人数は, ステレオタイプ抑制あり条件における視点取得あり条件では高群が15名, 低群が18名, 視点取得なし条件では高群14名, 低群が17名であった。ステレオタイプ抑制なし条件における視点取得あり条件では高群が15名, 低群が17名, 視点取得なし条件では高群が17名, 低群が14名であった。分析の結果, エイジズムの主効果が有意であり ($F(1, 119) = 6.65, p = .011, \eta_p^2 = .053$), エイジズム高群 ($M = 4.16, SD = 1.22$) は低群 ($M = 3.65, SD = 0.94$) に比べステレオタイプの判断の得点が高かった。

4 考察

(1) ステレオタイプ抑制と視点取得がステレオタイプの判断に与える影響

本研究では, 視点取得を用いることによってステレオタイプ抑制による逆説的效果が低減されるかどうかを検討した。具体的には, 高齢者ステレオタイプを対象として, ステレオタイプの抑制を行った際に, 対象人物に対して視点取得を行った場合は行わなかった場合に比べ, 高齢者に対するステレオタイプの判断の程度が低いという可能性を検討した。その結果, ステレオタイプ抑制の効果, 視点取得の効果およびそれらの交互作用効果もみ

られず、本研究で取り上げたステレオタイプの測定や視点取得とステレオタイプ抑制の操作の組み合わせでは、本研究で予測した逆説的效果や視点取得の効果はみられなかった。

(2) 自尊感情の役割

本研究ではさらに、視点取得、エイジズムおよび自尊感情の個人差を測定してステレオタイプの判断との関連を検討した。その結果、自尊感情の個人差を含めた分析では、視点取得なし条件では、自尊感情高群は低群に比べステレオタイプの判断の得点が低いことが示された。自己評価に関する先行研究では、自己評価を維持するために自己の価値が脅かされた場合には外集団成員に対する評価がネガティブになることが示されており (e.g., Fein & Spencer, 1997), 自尊感情が低い個人はステレオタイプの判断を行いやすいという本研究の結果は先行研究の結果と整合するものであると考えられる。

さらに、視点取得あり条件では自尊感情の高群は低群に比べステレオタイプの判断の得点が高く、自尊感情の高群では視点取得あり条件はなし条件に比べステレオタイプの判断の得点が高く、自尊感情の低群では視点取得あり条件はなし条件に比べステレオタイプの判断の得点が低いことが示された。これらの視点取得に関連する結果は、本研究の予測とは異なり視点取得を行うことによって自尊感情が高いほど高齢者に対して孤独なという判断を行いやすくなることを示唆していると考えられる。Galinsky & Ku (2004) では、視点取得を行った場合、自尊感情が高い参加者は低い参加者に比べ、対象集団を肯定的に評価しており、本研究の結果はこの先行研究とは一貫しない結果であるといえる。

このような結果が得られた理由として、本研究の実験参加者である日本の大学生において、自尊感情が高い個人ほど自己を孤独であると捉えている可能性が考えられる。自尊感情と孤独感については負の関係があることを示している先行研究が多いが (e.g., 諸井, 1987; Russel, Peplau, & Cutrona, 1980), 大東・岩本 (2009) では、大学生の孤独に対する捉え方は「否定的評価」、「自己成長機能」、「肯定的評価」の3つの側面があり、孤独に対して肯定的に捉える個人は否定的に捉える個人に比べ自尊感情が高いことが示されている。これらの結果から、日本の大学生において自尊感情の高い個人ほど孤独を肯定的に捉えているため自己を孤独であると捉えている可能性が考えられる。もしこのような自尊感情と孤独感の関連があるとするならば、視点取得を行うと自己概念が活性化され、その自己概念を用いて他者を捉えやすくなることが示されていることから (Galinsky, Ku, & Wang, 2005), 日本の大学生においては、視点取得を行うことによって自尊感情の高い個人ほど孤独であるという自己概念が活性化され、高齢者に対してもその自己概念を用いて孤独であると判断した可能性が考えられる。自尊感情と孤独に対する態度および自己概念における孤独の捉え方の関連については今後の実証的検討が必要である。

(3) 視点取得およびエイジズムの個人差とステレオタイプの判断

次に、視点取得の個人差を含めた分析では、視点取得の高群は低群に比べ、ステレオタイプの判断の得点が低い傾向がみられた。Galinsky & Moskowitz (2000) では、実験的に視点取得を操作し、視点取得を行うとステレオタイプの判断が抑えられることを示して

いる。本研究の結果は、個人差としての視点取得ではあるが、Galinsky & Moskowitz(2000)の結果と矛盾しないものであると考えられる。次に、エイジズムの高群は低群に比べ、ステレオタイプの判断の得点が高いことが示された。エイジズムの強い個人は、実際に高齢者に対してステレオタイプの判断を行いやすいと考えられる。

(4) 本研究の限界点と今後の課題

最後に、本研究の限界点と今後の課題を4点述べる。第1に、本研究では、視点取得とステレオタイプ抑制を操作して実験を行ったが、操作チェックの結果、操作の有効性が確認できなかった。視点取得とステレオタイプ抑制の操作方法や操作チェックの方法について今後の検討が必要である。本研究の視点取得の操作チェックでは、2名の評定者が参加者の記述内容について大学生の1日にどの程度当てはまるかを評定した値を視点取得の操作チェックのための指標とした。参加者は大学生ではあるが、視点取得の際に大学生という自己概念ではなく他の自己概念が活性化されていた可能性も考えられるため、視点取得の程度を正確に測定できる指標を用いる必要がある。Galinsky & Ku (2004)では、視点取得の操作チェックの指標として、視点取得を操作するためのエッセイ課題の記述内容が一人称で書かれているか三人称で書かれているかを評定し指標として用いており、分析の結果、一人称で書かれた割合は視点取得条件では70%であり統制条件では3%であり、条件間で有意な差がみられていた。しかし本研究の場合、日本の大学生が日本語を用いて記述しており主語を明確に使用し記述している参加者はほとんどおらず、このような主語を用いた操作チェックを行うことはできなかった。今後は、例えば、視点取得の操作のための課題の後に、その人の立場に立って想像したかどうかを尋ねる項目を設けて主観的な視点取得の程度を測定し操作チェックの指標とするなど、視点取得の操作チェックのための方法を検討する必要がある。

第2に、本研究ではステレオタイプ抑制による逆説的効果の低減方略として視点取得の効果を検討するために、高齢者の孤独などという特性を取り上げたが、逆説的効果がみられなかった。この理由として、ステレオタイプ抑制の操作による効果が、後続のステレオタイプの判断の測定課題まで継続していた可能性が考えられる。本研究では、ステレオタイプ抑制の操作として「高齢者には「孤独な」といったイメージがありますが、こういった高齢者のイメージに基づいて書かないように注意してください。」という内容を教示したが、この教示によってその後のステレオタイプの判断の測定時においても孤独などといったイメージを抑制していた可能性がある。実際に、本研究ではエイジズム得点はステレオタイプ抑制あり条件はなし条件に比べ低いことが示されており、この結果は、ステレオタイプ抑制の教示によって、その後のエイジズム尺度の質問項目での回答においてもステレオタイプが抑制されていたためであると考えられる。今後は、フィルター課題や教示によって、抑制課題とその後のステレオタイプの測定課題をより分離する必要がある。

さらに、ステレオタイプの判断の測定時に社会的望ましきによってネガティブな回答が避けられた可能性が考えられる。今後は、社会的望ましきをなるべく排除できるようなステレオタイプの判断の測定課題を用いる必要がある。また、本研究では、ステレオタイプ

的判断の測定課題として、高齢者の写真を提示し、その人物の印象について「孤独な」、「寂しい」、「独りぼっちの」、「孤立した」に7件法で回答を求めるといった印象評定を用いたが、今後は、語彙判断課題やIAT (Implicit Association Test) などを用いて参加者の意図や意識の影響を受けにくい潜在的な指標も扱い、顕在的反応と潜在的反応の比較を行うことも必要であると考えられる。

第3に、本研究では高齢者に対する孤独なというステレオタイプを取り上げ、日本の大学生を参加者として実験を行ったが、参加者において高齢者に対する孤独なという特性の当てはまりの強さがどの程度であるのかは明確ではない。日本の大学生を対象として、高齢者のイメージをSD法を用いて測定した研究では、「孤独な—にぎやかな」項目において中点よりも「孤独な」に偏った評定平均値が示され (西村・平澤, 2009; 渡辺他, 1997), 「孤立—連帯」項目において中点よりも「孤立」に偏った評定平均値が示されている (畔津・金・吉永, 2017, 今井・片岡・柳田, 1998; 梶谷・倉鋪, 2000)。これらの結果から、日本の大学生において高齢者に対して孤独なというステレオタイプがもたれている可能性が考えられるが、高齢者との同居経験や接触経験が高齢者に対する偏見に影響することも示されているため (石井・田戸岡, 2015), 今後は、参加者の対象集団との接触経験等も視野に入れる必要があるだろう。

第4に、本研究では、ステレオタイプ抑制の弊害である逆説的効果を低減することを目的として高齢者ステレオタイプを扱ったが、対象集団によってはステレオタイプの内容が異なるため、今後は他のステレオタイプも取り上げ検討を行う必要があるだろう。

〔注〕

- 1) 本研究はJSPS科研費20K14141の助成を受けた。
- 2) 本研究は日本大学文理学部研究倫理委員会の承認を得て実施された (承認番号: 01-49)。
- 3) 本研究の一部は日本心理学会第84回大会で発表された。
- 4) 分析から除外した自尊感情得点が中点の値であった5名を、自尊感情の高群に含めた場合と低群に含めた場合について同様の3要因の分散分析を行ったところ、どちらも視点取得×自尊感情の2要因の交互作用効果のみが有意であり5名を除外した場合と同様の効果がみられた (高群に含めた場合: $F(1, 121) = 8.82, p = .004, \eta_p^2 = .068$; 低群に含めた場合: $F(1, 121) = 11.13, p = .001, \eta_p^2 = .084$)。

〔引用文献〕

- 畔津忠博・金恵媛・吉永敦征 (2017) 「大学生が抱く高齢者に対するイメージに関する日韓比較—多主体間の長寿文化共有の試み—」『山口県立大学学術情報』第10号, pp.123-130。
- 石井国雄・田戸岡好香 (2015) 「感染症脅威が日本における高齢者偏見に及ぼす影響の検討」『心理学研究』第86巻, 第3号, pp.240-248。
- 今井雪香・片岡万里・柳田泰義 (1998) 「老人イメージに関する調査(2)—看護大学生と一般大学生との比較—」『神戸大学発達科学部研究紀要』第6巻, 第1号, pp.225-233。
- 梶谷みゆき・倉鋪桂子 (2000) 「看護学生の老人イメージに関する研究」『島根県立看護短期大学紀要』第5巻, pp.101-107。
- 桜井茂男 (1988) 「大学生における共感と援助行動の関係—多次元共感測定尺度を用いて—」『奈良教育大学紀要』第37巻, 第1号, pp.149-154。
- 大東美穂子・岩元澄子 (2009) 「青年の孤独に対する捉え方—孤独感, 自己意識, 精神的健康, 自我同一性との関連」『久留米大学心理学研究』第8巻, pp.75-84。
- 田戸岡好香・村田光二 (2010) 「ネガティブなステレオタイプの抑制におけるリバウンド効果の低減方略—代替思考の内容に注目して—」『社会心理学研究』第26巻, 第1号, pp.46-56。
- 西村純一・平澤尚孝 (2009) 「SD法による高齢者イメージの世代差と性差の研究」『人間文化研究所紀要』第3巻, pp.33-42。
- 原田謙・杉澤秀博・杉原陽子・山田嘉子・柴田博 (2004) 「日本語版Fraboniエイジズム尺度(FSA)短縮版の作成—都市部の若年男性におけるエイジズムの測定—」『老年社会科学』第26巻, 第3号, pp.308-319。
- 諸井克英 (1987) 「大学生における孤独感と自己意識」『実験社会心理学研究』第26巻, 第2号, pp.151-161。
- 山本真理子・松井豊・山城由紀子 (1982) 「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』第30巻, 第1号, pp.64-68。
- 渡辺久美・近藤益子・太田にわ・池田敏子・前田真紀子・太田武夫 (1997) 「看護学生の老人施設実習前後の老人イメージ」『岡山大学医療技術暖気大学部紀要』第8巻, 第1号, pp.85-90。
- Bargh, J. A. (1990) "Auto-motives: Preconscious determinants of social interaction," in Higgins, E. T. & Sorrentino, R. M. (Eds.), *Handbook of motivation and cognition: Foundation of social behavior* Vol.2, New York: Guilford Press, pp. 93-130.
- (1999) "The cognitive monster: The case against the controllability of automatic stereotype effects," in S. Chaiken & Y. Trope (Eds.), *Dual-process theories in social psychology*, New York: Guilford Press, pp. 361-382.
- Bargh, J. A., & Barndollar, K. (1996) "Automaticity in action: The unconscious as repository of chronic goals and motives," in Gollwitzer, P. M. & Bargh, J. A. (Eds.),

- The psychology of action: Linking cognition and motivation to behavior*, New York: Guilford Press, pp. 457-481.
- Davis, M. H., Conklin, L., Smith, A., & Luce, C. (1996) "Effect of perspective taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.70, No.4, pp.713-726.
- Devine, P. G. (1989) "Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.56, No.1, pp.5-18.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., Murphy, B., Karbon, M., Maszk, P., Smith, M., O'Boyle, C., & Suh, K. (1994) "The relations of emotionality and regulation to dispositional and situational empathy-related responding," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.66, No.4, pp.776-797.
- Erle, T. M., & Topolinski, S. (2017) "The grounded nature of psychological perspective-taking," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.112, No.5, pp.683-695.
- Fein, S. & Spencer, S. J. (1997) "Prejudice as self-image maintenance: Affirming the self through negative evaluation of others," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.73, No.1, pp.31-44.
- Galinsky, A. D., & Ku, G. (2004) "The effects of perspective-taking on prejudice: The moderating role of self-evaluation," *Personality and Social Psychology Bulletin*, Vol.30, No.5, pp.594-604.
- Galinsky, A. D., Ku, G., & Wang, C. S. (2005) "Perspective-taking and self-other overlap: Fostering social bonds and facilitating social coordination," *Group Processes and Intergroup Relations*, Vol.8, No.2, pp.109-124.
- Galinsky, A. D., & Moskowitz, G. B. (2000) "Perspective-taking: Decreasing stereotype expression, stereotype accessibility, and in-group favoritism," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.78, No.4, pp.708-724.
- Macrae, C. N., Bodenhausen, G. V., Milne, A. B., & Jetten, J. (1994) "Out of mind but back in sight: Stereotypes on the rebound," *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.67, No.5, pp.808-817.
- Oe, T. & Oka, T. (2003) "Overcoming the ironic rebound: Effective and ineffective strategies for stereotype suppression," in K. S. Yang, K. K. Hwang, P. B. Pedersen, & I. Daibo (Eds.), *Progress in Asian social psychology: Conceptual and empirical contribution*, Westport: Praeger, pp. 233-246.
- Richardson, D. R., Green, L. R., & Lago, T. (1998) "The relationship between perspective-taking and nonaggressive responding in the face of an attack," *Journal of Personality*, Vol.66, No.2, pp.235-256.
- Rosenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*, Princeton, NJ: Princeton University Press.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. (1980) "The revised UCLA Loneliness Scale:

- Concurrent and discriminant validity evidence,” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.39, No.3, pp.472-480.
- Wegner, D. M. (1994) “Ironic processes of mental control,” *Psychological Review*, Vol.101, No.1, pp.34-52.
- Wegner, D. M. & Erber, R. (1992) “The hyperaccessibility of suppressed thoughts,” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.63, No.6, pp.903-912.
- Wegner, D. M., Schneider, D. J., Carter, S. R., & White, T. L. (1987) “Paradoxical effects of thought suppression,” *Journal of Personality and Social Psychology*, Vol.53, No.1, pp.5-13.

(Abstract)

Suppressing stereotype thoughts leads to paradoxical effects (i.e. suppressing a stereotype facilitates the use of the stereotype itself). The present study examined whether perspective taking decrease its paradoxical effects. In the experiment was conducted on 138 university students. First, in order to manipulate stereotype suppression and perspective taking, participants were shown a photograph of an elderly person and asked to describe a day in the life of the person. Next, participants were shown a photograph of another elderly person and asked to rate the person to measure the elderly stereotype. Finally, participants were asked to respond to a perspective taking scale, a self-esteem scale, and an ageism scale. The results showed that, although there were no effects of the experimental manipulation or paradoxical effects, individuals with high levels of perspective taking had lower scores on stereotypic judgments than individuals with low levels of perspective-taking, and individuals with high levels of ageism had higher scores on stereotypic judgments than individuals with low levels of ageism. In addition, the results suggest individuals with high self-esteem more likely to make stereotypic judgments when they taking the perspective of an elderly person. The relationship between perspective taking, stereotypic judgments, and self-esteem was discussed.

